



Title	高校国語におけるトランスランゲージング授業：現代日本語・古語・英語の往還を通じた帰国生と一般生の協働学習
Author(s)	加納，なおみ；嶋田，龍司
Citation	母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究. 2026, 22, p. 148-162
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/105101
rights	This article is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-NoDerivatives 4.0 International License.
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

《研究論文》

高校国語におけるトランスランゲージング授業

— 現代日本語・古語・英語の往還を通じた帰国生と一般生の協働学習 —

加納 なおみ (國學院大學)

kano.naomi@kokugakuin.ac.jp

嶋田 龍司 (渋谷教育学園幕張中学校・高等学校)

rshimada@shibumaku.jp

Pedagogical Translanguaging Practices in High School Japanese Language Classes:

Collaborative Learning Among Returnee and Non-Returnee Students Navigating Modern

Japanese, Classical Japanese, and English

Naomi KANO and Ryuji SHIMADA

要 旨

近年、言語教育の国際的潮流は複数の言語資源を統合的に活用する学びを重視しており、日本の学習指導要領（2018 年改訂）も「言語の統合的運用力」を掲げている。本研究はこうした動向を背景に、日本の高校古典授業にトランスランゲージング（TL）を導入し、帰国生と一般生の協働学習の可能性を検証した。対象は私立高校 2 年生 3 クラス（計 87 名）で、『源氏物語』『桐壺』巻冒頭を原文・英訳・重訳で比較読解させた。授業は個人読解、グループ討論、全体共有から成り、事後アンケートを質的に分析した。その結果、帰国生は英訳とグループ討論を通じて内容理解を深め、これまで遠い存在だった古典との心理的距離を縮めることができた。一般生も英語比較を媒介に日本語の特徴を捉えるメタ言語的気づきを得て、協働学習の議論で学びを発展させた。両者に理解の深化と興味関心の高まりが見られ、古典への TL 導入の合理性と包摂的学習空間の意義が示された。

Abstract

In recent years, international trends in language education have emphasized learning that integrates multiple linguistic resources, a direction also reflected in Japan's Course of Study (revised in 2018), which highlights the development of integrated language proficiency. Against this backdrop, this study introduced translanguaging (TL) into classical Japanese instruction at the upper secondary level and examined its potential to foster collaborative learning between returnee and non-returnee students. Participants comprised three second-year classes at a private high school (N = 87). Students engaged in a comparative reading of the opening section of the "Kiritsubo" chapter of *The Tale of Genji*, using the original text, two English translations, and indirect translations. The lesson sequence consisted of individual reading, group discussion, and whole-class sharing, followed by qualitative analysis of post-lesson questionnaires. The findings indicate that returnee students deepened their comprehension through engagement with the English

translations and peer discussion, thereby reducing their perceived psychological distance from classical literature. Non-returnee students developed metalinguistic awareness of Japanese through English-mediated comparison and further extended their learning through collaborative dialogue. Overall, both groups demonstrated enhanced understanding and heightened interest, supporting the pedagogical validity of TL in classical literature instruction and its potential to promote an inclusive learning environment.

キーワード：高校古典教育、トランスランゲージング、英訳版テキスト、帰国生、協働学習

Keywords : High School Classical Japanese classes, translanguaging, Classical Japanese texts in English translation, returnee students, collaborative learning

1. はじめに

近年の教育改革は、知識伝達型から「言語を通じた思考と対話」への転換を求めており、学習者が自ら意味を構築し協働する姿勢を重視している。こうした学びを実現するためには、一言語の枠に閉じず、学習者の持つ複数言語資源を往還的に活用することが重要である。この方向性は OECD や UNESCO の提言に示されており、国際バカロレア（以下 IB）や CEFR-CV といった国際的枠組みにも反映され、「複数言語資源の統合的活用」が強調されている。日本の高等学校学習指導要領（2018 年改訂）でも「言語の統合的運用力」の育成が明記され、国語科が中心的役割を担いながら外国語科などと連携を促進することが求められている。しかし日本の現状では、国語と外国語を切り離して扱う言語教育の枠組みが維持されており、深い思考力を特定の一言語に限定せず複数言語に共通して汎用的に発揮できる形で伸ばしたり、複数言語を操るコミュニケーション方略を学んだりする授業実践は十分に行われていない。

こうした国内外の潮流を背景に日本の言語教育全体を見渡すと、海外の現地校で長年教育を受けて帰国し、日本の教育システムに編入される帰国生への対応も再考が求められる。一般的に帰国生は「話し言葉」にはある程度慣れていても、「書き言葉」や「文語（古語）」に触れる機会は限られるため、従来は取り出し授業など個別・特別支援が中心となってきた。しかし、帰国生の多くは複数の言語レパートリーと豊かな国際経験を持っているため、彼ら自身の言語文化的資源をさらに発展させると同時に、その多様な言語文化的経験が日本社会の中で活かされ、日本育ちの生徒の成長にも資するためには、依然として課題が残っている。その一例として、帰国生の多言語レパートリー（英語力など）は、国語の授業において事実上、言語資源として位置付けられていないという現状がある。その背景には根強い「母語話者規範」があり、これにより帰国生の言語レパートリーは日本語とそれ以外の言語とに切り分けられ、日本語以外の言語使用が学習資源として正當に活用されにくい状況が生じている。さらに、このことは限られた日本語力で国語学習への参加を求められる帰国生にとって学習参加の障壁となり、帰国生と日本育ちの一般生とのあいだに学習機会上の分断を生み出す要因ともなっている。

しかし、この問題は帰国生に固有のものではなく、日本の言語教育全体に内在する構造的課題として捉え直す必要がある。すなわち、日本の言語教育では、学習者が自らの複数の言語レパートリーを横断的に活用し、思考や理解を深めたり、優位な言語で培われた思考力を他の言語の学習に活かしたりすることが、十分には想定されていない。その結果、学習者は本来活用可能な認知的資源を活かし

きれないまま学習を進めることになる。このような言語レパートリーの切り分けや学習者間の分断を乗り越える契機として、学習者の言語レパートリーに立脚するトランスランゲージング（以下 TL）教育論の導入は有効である。前述のとおり、国語授業においても「言語の統合的運用力」の育成が重要視されている現在、国語に TL を導入する試みには意義がある。特に「母語話者不在」という特性を持つ古典教育は、現代語との比較を通じた学習が必須であり、複数の言語資源を往還しながら理解を深めるという点で、すでに TL 的实践を内包している。したがって、古典教育は、国語に TL を導入する際の合理的な出発点となり得る。

2. 先行研究

国内外で「言語の統合的運用力」の育成が急務とされる中、国語教育を軸とした日本の現状は依然、実践も研究も不十分である。水谷（2008）は、学校教育としての「国語」が長期にわたり「規範性・標準性」を積み上げ、現場に「正しさ」の強い拘束を生むと同時に、他教科との連携を阻んできたと指摘した。安田（2014）は国語＝単一言語制度という歴史的枠組みを示し、学校教育による標準語普及の中で言語の多様性が阻害された経緯を論じている。生越（1980）は、日本は単一言語国家だと言説が長年支配的だったためバイリンガリズムの研究が遅れ、最初に二言語使用が国内で注目を集めたのは帰国生の教育が社会問題化した時であったと述べている。大津（2017）は、2018 年改訂の国語の学習指導要領が、言語を個別的に捉えるだけではなく、「ことば (language)」として有機的に関連づけて捉える視点を打ち出したことを評価しつつも、教育現場における戸惑いを払拭するためには言語の枠を超えた共通の言語教育的基盤を形成する必要があると指摘している。

国際的な研究動向に目を向けると、言語教育の近年の潮流は、母語話者規範を完全に払拭してはいないものの、TL 理論と相互に作用しながら多言語規範へと確実に移行していると言える。2020 年に公表された CEFR-CV では「言語の統合的運用 (plurilingual and pluricultural competence)」が明示的に提唱され、学習者が複数言語のレパートリーを統合的に用いて意味を構築し、問題解決や協働にあたる能力が強調されている (Council of Europe, 2018)。CEFR-CV が擁する複言語主義は TL との理論的親和性を示しており (Lankiewicz, 2020)、両者は教育現場において相互補完的に機能し得ることも指摘されている (Moore & Vallejo, 2018; Vallejo & Dooly, 2020)。一方、学習者を本質的に多言語話者だと捉える IB は、思考と言語の往還を促し生徒の自律的な学びを支援する、TL 教授法を公式に推奨している (国際バカロレア機構, 2014)。このように、言語教育の国際的潮流は、母語話者規範を完全に脱却してはいないものの、TL など多言語規範へと着実に移行している。

近年 TL 教育論¹⁾はアメリカを中心に発展を遂げており、この背景には、国内外において英語一強という特殊な社会言語学的環境があるが、その理念は国際的に広く影響力を持つ。García & Li (2014) は、アメリカにおいてマイノリティの子どもたちが日常的に多言語を駆使しながらも、その実践が学校教育の中で差別されてきたことを指摘し、TL をマイノリティ教育の権利保障のための枠組みとして提示している。ポストコロニアル社会においても同様であり、Cenoz & Gorter (2017) は、複数言語が接触する教育現場において、TL が少数派言語の維持・発展を支え、マイノリティの学習者の健全なアイデンティティ育成に有用であることを指摘している。さらに、言語資源を柔軟に活用する TL はマイノリティだけではなく、マジョリティを対象とした CLIL 授業や高等教育にも広がりを見

せている（加納, 2025）。

一方、日本の国語教育では“TL”を明示的に掲げる研究はまだ少ないが、英訳・重訳・訳詩創作・比較読解を核に多言語資源の往還＝媒介を授業設計に組み込む実践が蓄積されている。對馬（2020）は夏目漱石『こころ』を英訳と比較する授業を通じ、現代文理解に英語を活用する可能性を示した。西岡・片桐（2023）は漢詩を英訳する学習過程を分析し、異言語資源の活用が学習者のイメージ形成に寄与することを明らかにした。柁木（2023）は国語教育と英語教育の連携の歴史と方法を整理し、教科横断的視点の意義を強調している。古典教育における多言語的实践には、朝倉（2017）がドナルド・キーン英訳『徒然草』を用いた授業を行い、古典理解の深化を報告した。嶋田（2024）は『枕草子』の複数英訳を比較し、学習者に視点の転換を促す効果を示した。那須（2017）は『古事記』英訳を教材に、国語と英語を接続する古典学習の可能性を検討した。竜田（2017）は英訳百人一首を教材化し、古典学習の新たな展開を提示した。

以上のとおり、先行研究においては、国語教育を他の言語教育と連携させ、学習者の言語能力を統合的に育成する必要性が指摘されてきた。特に、国語教育が母語話者規範に強く依拠している点が議論的となっており、言語イデオロギーとして批判されている。一方で、TL 研究は主にマイノリティ言語話者の教育支援に焦点を当て、母語話者規範を乗り越える理論的基盤を提示してきた。しかし、マジョリティ言語話者を対象とした国語教育への適用可能性については、十分に議論されていない。また、古典分野においては母語話者が存在せず、翻訳や注釈を通じた学習が前提であることから、多言語的資源を活用する合理性が高い。この点において、国語古典教育と TL の接続は理論的にも実践的にも未開拓の領域である。さらに、教育実践上の課題としても、帰国生や一般生が協働的に学び合う仕組みが求められており、TL はその課題に応答し得る可能性を持つ実践的手法である。

以上をふまえ、本稿では、「関心はあるが難解なため自力では理解し得ない」古文の読解に、帰国生が一般生とともに取り組むことで、双方にどのような影響があるかを、TL 教授法を取り入れた高校国語授業の実践を通して考察する。

3. 問題の背景

3.1 多言語背景の生徒の増加

近年、帰国子女や海外にルーツのある生徒が公立・私立を問わず、日本の全日制普通科に入学することが増えている。文部科学省（2024）では公立高校の日本語指導が必要な外国籍の生徒数を2年ごとに調査している。その結果は平成30年度3677人、令和3年度4292人、令和5年度4991人と年々増加している。日本語指導が必要な日本国籍の生徒数は平成30年度495人、令和3年度516人、令和5年度582人とこちらも年々増加している。一方、私立学校についてはこのような統計的データは存在しないが、もし私立学校の生徒数が加わるとさらに多くの日本語指導が必要な生徒が全国にいることになる。本稿の調査対象校（3.2に詳述）は、そのような学習者層を含む学校である。

3.2 調査対象校の状況

今回の調査対象校は、千葉県の私立の中高一貫校であり、様々なルーツを持つ生徒が入学している。国際性を重視した教育方針を特徴とし、帰国生を一定数受け入れている点に特色がある。調査対象者

の属性を明らかにするため、高校2年時までどのような教育が行われているかを以下に述べる。

中学入試制度には、国語・英語・理科・社会の4科目による一般入試と、英語を中心とした帰国生入試がある。以下、一般入試で入学した生徒を一般生、帰国生入試で入学した生徒を帰国生と呼ぶ。入学後、帰国生の英語の授業は所属クラスからの取り出し授業となり、ネイティブ教員によって一般生とは別に行われる。一般生の中にも海外にルーツを持つ生徒がおり、特別な試験によって帰国生と同等の英語力があると判断された場合には、翌年度から帰国生と同じ英語授業を受講することができる。

中学生の国語は、「文学」（説明的文章および文学的文章の読解）と「表現」（多様な言語表現活動や口語文法等）の2科目に分かれている。このうち「表現」は、帰国生については取り出し授業として実施され、メイン教員とサブ教員の2人体制で指導が行われる。なお、学習状況や試験結果によっては、所属クラスでの授業に変更される場合もある。このように、国語の「表現」（および数学の「数量」）では、帰国生を対象とした取り出し授業が設けられている。これらの取り出し授業は最長で中学2年終了時まで行われている。中学3年以降は所属クラスでの一斉授業のみとなるため、それまでに一斉授業に参加可能な日本語力を身につけることが求められる。

調査対象となった学年では、中学からの入学者は約300名で、高校入試により2クラス分の生徒が加わった。高校2年時では、文系・理系、中学入学・高校入学の区別のないクラス編成となっている。なお、帰国生は英語の別授業の関係で、全9クラス中の4クラスのいずれかに所属している。帰国生の多くは幼少期を英語圏で過ごしており、進路として国内大学だけではなく海外の大学を目指す生徒も多い。このような教育環境が、本調査で扱う「高校古典授業での帰国生と一般生の協働学習における可能性」を考察する上で重要なフィールドを形成している。

4. 研究目的・研究課題

高校2年生の時点では日常会話には支障がない帰国生でも、古典の試験の得点を一般生と帰国生という観点で見ると、定期試験において平均で10点以上の差があった。現代文でも同様の傾向にあるが、特に古典は馴染みが少なく、伸び悩んでいたのが現状である。古典の時間で読解に苦戦している様子や帰国生自身が元々持っている言語的不安を耳にすることがあった。以上のことから、現場で指導に当たっていた本研究の共著者の一人である嶋田は、帰国生へのアプローチの工夫の必要性を強く意識するようになった。以前から古典授業で英訳を活用した実践に取り組んできたが（嶋田, 2024）、本研究ではその実践を発展させて、TL教育論を取り入れた授業によって帰国生と一般生の学びの可能性を検討した。その際、帰国生だけに着目するのではなく、一般生とともに協働学習することで、一般生にとってもどのような影響があるのか、相互にどのような学びを実現するか、明らかにすることを目的とした。特に「理解」「興味」の変化に焦点を当て、古典の授業でTL教授法が帰国生のインクルージョンにどのように寄与し得るか、それが一般生にどのように影響を与えるかについて示唆を得ることを目指した。

5. 研究方法

5.1 対象クラスと使用教材

本実践は、2024 年 11 月、調査対象校の高校 2 年生を対象として実施した。帰国生を含む 2 クラスおよび一般生のための 1 クラスの計 3 クラスであり、国語科教員の嶋田が古典の授業内で実施した。嶋田は高校の非常勤講師としての勤務を含めて国語科・古典授業の指導経験を通算 10 年有しており、大学・大学院では『源氏物語』を中心とする王朝文学を専門として研究してきた。当初は授業時の参考資料として英訳を配布するにとどまっていたが、近年は古典学習における英訳の有用性に着目し、英訳を活用した授業実践について探究している。

教材は定番教材であり、英訳などの関連書籍も充実している『源氏物語』『桐壺』巻の冒頭を扱った。原文、Waley (2010) の英訳を中心に Seidensticker (2023) を併用し、それにくわえて佐復 (2008) の重訳テキスト (Waley 訳の現代日本語訳) を用いて、訳文間の表現の違いや文化的背景の反映を比較・読解した²⁾。重訳テキストも紹介することで、英語が不得意な生徒でも議論に参加できるよう、多方面に配慮した。

グループワークは帰国生を均等に分けるなどの編成を行わず、座席に基づいて自然な形での 5、6 人の班での話し合いとした。前述のとおり、クラスには文系・理系、中学入学・高校入学が混ざる形で所属しており、今回の 3 クラスの内の 2 クラスでは帰国生・一般生もいて、その点ではグループワークで様々な立場からの議論が期待される。使用言語についても特に言及・制限をしなかった。その結果、帰国生同士で Waley 訳と Seidensticker 訳のどちらがよいかを英語で議論する場面も見られた。

5.2 データ収集

生徒の古典や英語についての理解度・興味には個人差があるため、TL 教授法および協働学習を組み合わせて、その教育的効果や学習意欲の向上を検証した。授業は①教員による翻訳に関する解説、②個人での気づき、③グループでの対話、④クラス全体での共有、⑤教員によるまとめと補足の 5 段階から成る。授業後にはアンケート調査（詳しくは 6.1 参照）を実施した。帰国生 16 名、一般生 71 名の計 87 名の回答を「理解の深まり」「古典への興味」「多言語テキスト使用」などの観点から質的に分析した。

5.3 授業の流れ

事前に古文本文を古語の意味や助動詞、敬語をふまえて読解する授業を 50 分 3 コマ行った。これにより、古文での意味内容やあらすじについて一通りの確認を済ませた。そして英訳を配布して、事前に読んでおくことができるようにした。その後の 50 分の授業では以下の①～⑤の内容を取り扱った。

- ① Waley 訳・Seidensticker 訳など、様々な翻訳を紹介。《5 分》
- ② 個人で Waley 訳を中心に読み込む。《10 分》
- ③ グループで英訳の内容や工夫などを話し合う。《20 分》
- ④ 興味深い相違点等を各グループの代表者がクラス全体に共有《10 分》
- ⑤ 教員による総括と補足《5 分》

①は Waley 訳・Seidensticker 訳・谷崎潤一郎訳など、様々な翻訳を紹介して導入とした。そしてまず個人で Waley 訳を中心に読み比べの時間を取り、その後グループワークの時間で、この活動を重視した。そして各グループの代表者が話し合いの内容を全体に共有、最後に教員の総括と補足という流れで行った。生徒に提示した本文で、例えば『源氏物語』の冒頭の訳を対照すると以下になる。

【古文】

いづれの御時にか、女御・更衣あまたさぶらひたまひける中に、いとやむごとなききにはあらぬが、すぐれて時めきたまふありけり。

【Waley 訳 (W 訳)】

At the Court of an Emperor (he lived it matters not when) there was among the many gentlewomen of the Wardrobe and Chamber one, who though she was not of very high rank was favored far beyond all the rest;

【Waley 訳重訳・佐復秀樹 (W 重訳)】

ある天皇の宮廷に（彼がいつの時代に生きていたのかはどうでもよい）、衣装の間や寝室につかえる女性たち〔更衣・女御〕が大勢いたなかに、とても身分が高いわけではなかったが、ほかの者たちよりもはるかに寵愛を受けている人がいた。

【Seidensticker 訳 (S 訳)】

In a certain reign there was a lady not of the first rank whom the emperor loved more than any of the others.

それぞれを対照することで、言葉の選択や表現上の違いなどが明確になる。特に Waley 訳は冒頭では「Court」「gentlewomen of the Wardrobe and Chamber」などヨーロッパの王宮文化を連想させるような古風な語の選択があり、訳にも特徴があることから今回中心的に扱うテキストに定めた。

5.4 話し合いガイド項目

グループワークにおいては、焦点化すべきポイントや検討手順が示されていない状態で比較や議論を行っても、十分な気づきが得られにくい。そのため、5.3 ③で示したグループワークの段階において、話し合うべき中心的な項目を教員から提示した。以下は話し合いのガイドとなるように、生徒に配布したプリントの 5 項目に補足を加えたものである。

- 個人で比較して気づいた点・考えたこと 《まず、自分自身で読み込む》
- グループで話し合ったことや話し合ってきた意見 《協働学習での新たな気づきを得る》
- 「母北の方なむ、いにしへの人のよしあるにて」は W 訳「Her mother, who never forgot that the father was in his day a man of some consequence,...」(W 重訳「母親は、生きていたときには

彼がひとかどの有力者だったことを忘れられずに…」となっている。古文本文と比較して W 訳ではどのように解釈していると考えられるか。《Waley 訳・古文の解釈の違いに気づく》

- W 訳「but to return to the daughter」（重訳「だが、娘のことにもどろう」）は古文本文にはない表現だが（「なほ抛りどころなく心細げなり。●前の世にも、御契りや深かりけむ、世になくきよなる玉の男皇子さへ生まれたまひぬ」）、なぜ W 訳では付け加えられていると考えられるか。本文ではちょうど「●」のところに追加されている。

《Waley 訳・古文の解釈の違いと、主語が変わった際の英語の特徴に気づく》

- 「御局は桐壺なり」は比較的后半にあるが、角田光代訳では「女に与えられた部屋は桐壺という」と冒頭に説明が入る。この違いについて、考えを記述しなさい。《古文・現代作家による現代語訳の違いに気づく》

これらの項目を含んだグループ討論を通して、Waley 訳と古文との解釈の違い³⁾や、英語の特徴、また古文と作家による現代語訳の違いなど、より高度で深い読み込みが必要なものとなっている。それぞれ学習者の全言語資源を活用して、古語・英語・現代日本語を行き来して考え、学ぶことになる。

6. アンケート結果と考察

6.1 アンケート項目

授業後のアンケートの質問は、以下の四つとした。事前に古文本文の読解は済ませているため、古文本文の解釈や心情把握よりも、英訳との比較によってどのような変化が見られるか否かを中心にした。

- ①英訳との比較をして『源氏物語』『桐壺』の巻の理解が深まりましたか。（回答を、5「とてもそう思う」、4「どちらかといえばそう思う」、3「変化なし」、2「どちらかといえばそう思わない」、1「全くそう思わない」の5件法で示し、その理由を記述）
- ②英訳との比較をして『源氏物語』や「桐壺」巻に対する興味が増しましたか。（回答方法は①と同様）
- ③英訳との比較をして、考えたこと・感想を書いてください。
- ④英訳や日本語訳を絡めた活動で、もっとこのようなことがしたい、活動の流れややりかたについて、提案があれば書いてください。

以下、今回の新たな試みである英訳との比較が多様な背景を持つ生徒達の古典の理解や興味・関心の深まりにどのように寄与したのかという点を、アンケート結果や生徒のコメントを中心に考察していく。

6.2 アンケート結果 その（1）帰国生の傾向

まずは帰国生 16 名のアンケート結果について、以下、上記アンケート項目①・②の 5・4 を肯定的、3 を変化なし、2・1 を否定的として集約したデータに基づくグラフを掲出する。生徒のコメントでは

「より親しみのある英語で読むと表現の違いがあることに気づいて楽しかった」「古文でしか表現できない風情を英訳と比較して感じた」など活動を通じて言語の特徴に気づいて、肯定的な印象を持った帰国生が多い。特に図1の理解の深まりでは81%だった。他にも「英語の解釈を読むことで、解釈の仕方がわからないところが解消された」と古文本文ではなかなか読み解けなかった部分が英訳を読んで解消されたというコメントがあった。

図1で否定的回答が6%(1名)と示されているが、そのコメントとして「翻訳者のバイアス(悪いとは限らないが)の影響が強い」とあった。Waley 訳についての意見だと考えられるが、古文本文と英訳との整合性をふまえて、古文本文自体への理解に寄与しているかという観点で不十分と評価した結果だろう。アンケートの結果としては、否定的のところには分類されるが、古文と英訳との比較についてよく思考できている結果ともいえる。そして、本文に忠実に直訳することがよいのか、翻訳される言語や文化をふまえたり、翻訳者の解釈が含まれたりする意識・自由訳がよいのか、翻訳のあり方を考える契機になる気づきであった。最後のまとめとしてクラス全体で議論してもよい内容だと考える。

図1 帰国生の理解の深まり

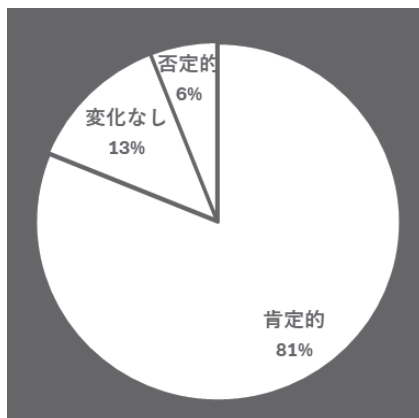
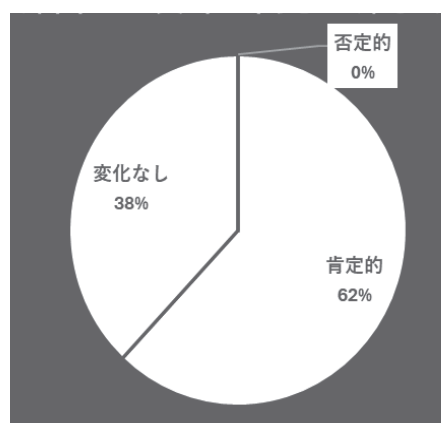


図2 帰国生の興味・関心の深まり



6.3 アンケート結果 その(2) 一般生の傾向

次に一般生のアンケート結果について述べる。生徒のコメントでは「比較をしたことで、古文独特の書き方がはっきりわかった」「翻訳への考え方によって構成まで変わっていて、なおさら本文(原文)への興味がわいた」と、比較を通じてメタ言語的な理解が進んでいることがわかる。また、「古典単語でわからないものがあったても英単語ならわかる」と内容の理解について助けになっていたことが見受けられた。図3の理解の深まりについて半数以上が肯定的である一方、「変化なし」37%は元々の英語への苦手意識や、1コマの授業で英訳の読み込みからグループワークまで行ったため、十分な比較をできなかったことに起因すると考えられる。前者には重訳の活用で配慮したが、これらの点については今後の改善の余地がある。図4では「変化なし」が56%と多く見えるが、「もともと興味はあったので英訳との比較で特に変わったとかはない」「もともと源氏物語が面白くて好きだから」など、すでに興味が十分にあったとの回答も複数含まれている。

図3 一般生の理解の深まり

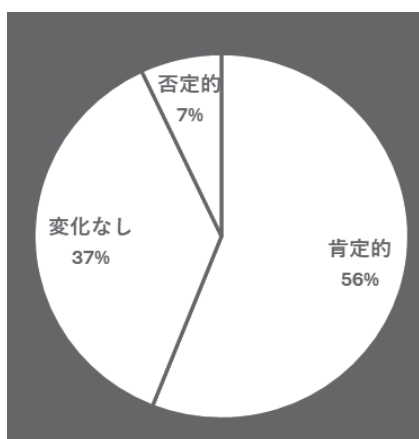
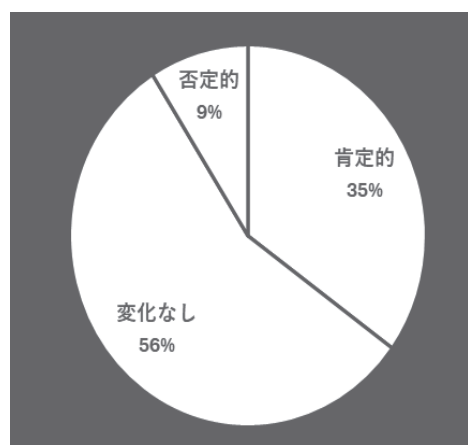


図4 一般生の興味・関心の深まり



6.4 帰国生と一般生の比較 その（1）理解の深まり

次に、帰国生と一般生の理解の深まりの比較（前掲図1、3）を行う。やはり言語的な馴染みがあることからか、帰国生の方が英訳を用いることによって「理解が深まった」という回答率が高い。一方、一般生も「古文では省略される主語が英語で明示される、複雑な敬語がない、多義的な古語の意味が一つに定まる」などの英語の特徴により、理解の深まりを認識している。つまり、帰国生だけではなく一般生も英語のテキストによる新たな気づきを得ていることがわかる。

図1 帰国生の理解の深まり

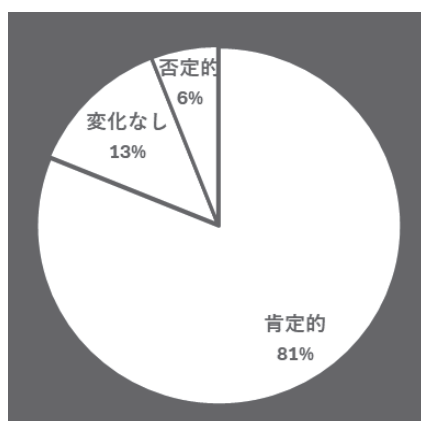
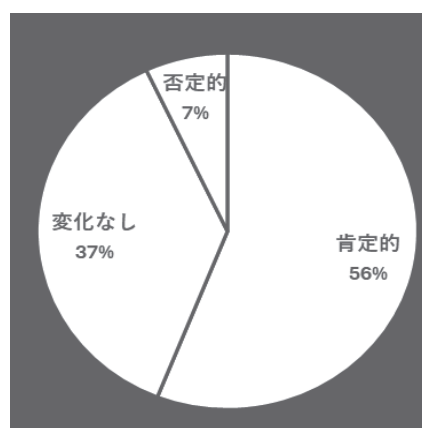


図3 一般生の理解の深まり



6.5 帰国生と一般生の比較 その（2）興味・関心

興味関心の比較（前掲図2、4）では帰国生も一般生も「（同じ内容を扱っているのにそれぞれのテキストが）微妙に違うところが面白い」「もともと大河（ドラマ『光る君へ』）を見ていたので興味はあったが、多方面からの解釈で興味が増した」など、メタ言語的意識の高まりや、すでに十分な興味・関心があったことが見受けられた。ただし、特に帰国生では「肯定的」が一般生の2倍近くあった一方で、「否定的」が皆無だったことから今回の実践を通じた興味・関心の深まりがより際立っていたことがうかがわれる。

図2 帰国生の興味・関心の深まり

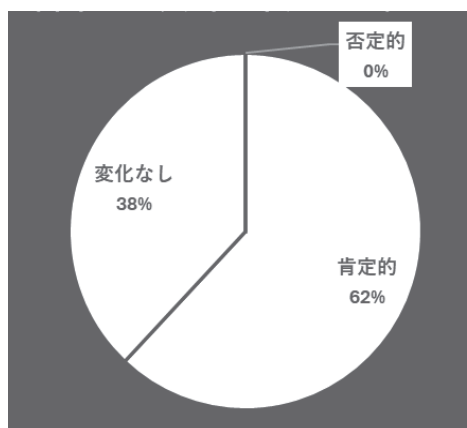
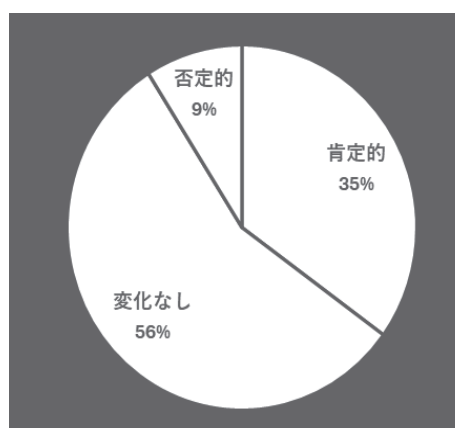


図4 一般生の興味・関心の深まり



6.6 その他の記述回答について

まず、「6.1 アンケート項目」①・②の選択理由および③の記述回答をもとに生徒の反応を整理する。

帰国生の記述回答からは、(1) 英訳との比較による古文理解の促進、(2) 翻訳の違いから受ける印象、(3) グループワークについてのコメントが目立った。(1) については、「自分にとっては英語の方が理解しやすく、あまり分からなかった部分が明確になって理解が深まった」「古文を理解するのは難しいが、英語の方が早く内容を飲み込めるため助かった」といったコメントがあり、英語を媒介とすることで古文の内容把握が容易になったことがうかがえる。また(2)に関連して、Waley 訳と Seidensticker 訳という二つの英訳を比較したことについて、「意外と差が多く、二つの視点から古文の理解を深めることができた」「英訳自体を読み取ることの難しさにも気づいた」といった記述も見られ、翻訳の違いに着目することで原文理解が深化している様子が示されている。一方で、「英語の方が細かくて分かりやすい反面、古典のほわっとした良さが失われてしまう気がした」というコメントもあり、感覚的ではあるものの、英訳との比較を通して、古文特有の表現の味わいや曖昧さといった特徴を再認識する契機にもなっていた。さらに、(3)については、「グループワークが楽しかった」「もっとこのような活動を行いたい」「特に帰国クラスは盛り上がる印象だった」といった意見から、協働的な学習形態そのものに対する肯定的な評価も確認できる。

一般生のコメントからも、(4) 英訳との比較、(5) 帰国生とのグループワークが、共に理解の深化につながったことが読み取れる。(4) については、「英文と比較したことで、古文独特の書き方や誤読しやすい箇所の細かいニュアンスがはっきり分かった」といった記述などから、翻訳との対照が本文の精読を促したことを示している。また、(5) については、「自分一人では違いを感じ取るのは難しかったが、隣の帰国生にニュアンスを教えてもらいながら理解できた」「グループワークは良いと思う。帰国生が一人いると安心する」などのコメントがみられ、帰国生との協働を通して新たな学びが成立していた様子がうかがえる。

これらの記述から、本実践は帰国生のみならず一般生にとっても、異なる言語資源を有する他者との対話や視点の共有を通じて古文理解を深める学びの場となっていたことが示されている。

一方で、④「英訳や日本語訳を絡めた活動で、もっとこのようなことがしたい、活動の流れややりかたについて、提案があれば書いてください」の項目では、肯定的なコメントの他に、「良いアプロー

チであるが、これが多すぎても授業が進まなくなってしまうのではないかと思った」「長すぎるので一部抜粋とかでもいいと思う」「他の班とも意見交換の時間があるとさらに面白そうです」とあり、比較やグループワークにかかる時間配分や扱う文章の長さについては、その都度考える必要性を改めて感じた。

6.7 今回の調査に基づく考察

本研究の研究目的(第4節参照)に照らして整理する。今回の調査に基づく結果から、古文の読解において TL 教育論を取り入れた協働学習は、帰国生と一般生の双方に対して相互補完的かつ発展的な学びを生み出すことが示唆された。具体的には、帰国生は自身の英語という言語資源を用いて英訳を手がかりに古文の内容理解を進めるとともに、英訳から得た気づきを一般生と共有する過程で、それを言語化して説明する役割を担っていた。この過程は、帰国生が自身の言語能力を学習資源として活用し、授業内で主体的に位置づけられるという点で、帰国生のインクルージョンの一側面を示すものと考えられる。

一方、一般生は自身の古文読解に加え、グループ内で帰国生と議論することで英訳の内容や表現の特徴を理解し、それを通して古文の意味内容をより立体的に捉えることが可能となった。また、古文と英語の表現の違いに触れることで、主語の省略や敬語など古文の特徴への意識が高まり、メタ言語意識の形成にもつながっていた。

このように、帰国生が英語を媒介として古文理解を補完し、その知見を共有する一方で、一般生はそれを手がかりに古文理解を深化させるという形で、両者の言語資源が相互に活用される学習が成立していた。これらの傾向は、「内容理解の促進と効率化」「メタ言語意識の高まり」「包摂的な学習空間の形成」など先行研究(e.g., Baker, 2006; García & Li, 2014; 加納, 2016)が指摘する TL 教育の特質を支持する結果であった。

以上の結果は、TL を取り入れた古典授業が帰国生の学習参加を促すだけではなく、帰国生の言語資源を教室全体の学習資源として活用することで、一般生の理解や言語意識にも影響を与える可能性を示唆している。さらに、古典読解において英語を含む複数言語を往還する学習が理解を促進し得ることを示しており、日本の国語教育が前提としてきた単一言語的な学習観を再考し、学習者の多様な言語資源を活用する授業の可能性を示すものと考えられる。

大学では分野横断や学際的な取り組みが推奨される一方で、一般的に高校の教育現場では他教科との連携への遠慮や、業務が多忙なこと、時間数の余裕のなさなどからか、なかなか分野横断的な内容を扱うことは難しいとされる。しかし、今回のような通常の読解活動に接続した多言語活用授業は、古文本のみの読解を行うだけの授業よりも深く、また多角的な視点を養うことにもつながる点で有意義な試みだと考えている。

今回、国語科教員である嶋田が単独で行ったが、授業の内外で英語科教員に協力を求める方法も可能である。また、各学校の実態に即してやりやすいように実践の内容を変えながら、実施していくことが望ましいと考える。

今回は事前の読解に3コマ、そして1コマで比較をしたが、グループ発表では代表者の報告も熱がこもって長くなったことから、比較と共有の時間を3コマに増やすと、想定をさらに越えた読み取りも多く生まれたのではないかとと思われる。また、班員それぞれに役割を持たせるなど、取り組みの

工夫もさらに考えていく必要がある。

今回は自己評価が主となったが、数字では表せない新たな学びを共有できたと考えている。今後は、より客観的な評価方法も模索する必要がある。古文の内容を踏まえながら英訳を比較読解し、最終的に現代日本語で言語化して他者に説明するという複数言語の往還によって、TLを介した帰国生との協働的学習は、帰国生だけではなく一般生にとっても多面的な学びを促進していた。これらの点をより明示的に検証するため、実際の話し合いの様子を録画して、言語データとして分析することも検討していきたい。

7. 汎用性と発展

今回は『源氏物語』を用いたが、国語教材の英訳は数多くある。現代文や漢文でも類似の取り組みが可能だろう。今後ますます実践の蓄積が増えれば、指導者へのヒントとなり、学習者へ様々なアプローチを提供することができる。

また別のメディアの活用として、マルチモーダル的なものとしては、漫画や映像資料などのメディアを英訳などと組み合わせることもできる。今回のアンケートで生徒からも「古文は大河ドラマとかの映像があると分かりやすく理解できる」というコメントがあり、『源氏物語』も『源氏物語 千年の謎』など複数回映画化されているため、その映像を視聴しても理解の助けになったかもしれない。以下は一例だが、『百人一首』と漫画との比較、また古典作品と大河ドラマ『光る君へ』との比較、『源氏物語』の複数ある漫画との比較なども授業化することができ、このような手法はTLのマルチモダリティという特質とも呼応する。

以上、今後の汎用性や発展についても述べた。今回の取り組みのように、現代日本語・古語・英語という異なる言語・メディアを往還することで、帰国生のみならず一般生への学習にも寄与できる試みになる。古典授業へのTLの導入的実践は、実質的に過去になく、帰国生のための授業ではなく、一般生を含んだ一斉授業の中でも様々な工夫の可能性・余地があると考えている。クラス全員の学びにつなげる設計を、教員は引き続き模索する必要がある。

8. 総合考察

本稿は、学習指導要領の改訂に対応した国語・古典授業において、初めてTLを取り入れた授業実践を分析したものである。本授業デザインは、CEFR-CVやIBといった国際的に有力な言語教育フレームワークにおいて強調される「言語の統合的使用へのシフト」という潮流と軌を一にする点にも意義がある。

古典の学習は、一般生と帰国生の双方において「産出」ではなく「理解」が中心であり、授業は従来現代日本語を媒介語として展開されてきた。すなわち、古典という領域は「母語話者」が存在しないため、「母語話者規範」に縛られにくく、また、媒介語の使用が前提であることより、TLを導入する合理性を備えていると言える。そのうえで、媒介語の種類を増やすことは教室全体の言語資源を拡張し、教師と生徒の双方にとってより豊かな学びを可能にする。特に「テキストが読めないため授業が成立しにくい」という言語教育に普遍的な課題に対しても、複数の言語的足場かけを提供すること

によって、生徒の知的好奇心に寄り添いながら理解を深める道筋を開くことができる。

このように、トランスランゲージング・スペース (Li, 2018) を創出することは、学習環境の包摂性を高めると同時に、多様な言語資源を活用し知的に豊かな学びを実現する契機となる。さらに、国語授業は母語話者規範の干渉によって多言語資源を活用しにくく、改訂された学習指導要領の理念に十分応じられずにきたが、本研究は汎用性のある一つの具体的手法とそれを支える理論的基盤を提示した。今回の実践では、帰国生の肯定的な反応に加え、一般生にとっても有益な学びが成立したことから、TL はマイノリティ生徒だけに限定される手法ではなく、マジョリティを含む言語資源統合的授業の実現にも寄与し得ることが示唆された。このことにより、教授法や教育理論によってマイノリティ生徒とマジョリティ生徒の分断が緩和され、より包摂性の高い言語教育が実現されることが望まれる。さらに、言語資源の統合がマジョリティの生徒にとって有益であるだけでなく、その実践がマイノリティ生徒に対する理解と敬意を育み、彼らの学びを社会的に正当に位置づけることにもつながる。

9. おわりに

本研究で報告した古典授業における TL 実践は、学習指導要領改訂の方向性と国際的潮流をつなぐ試みの一端である。とりわけ、従来の国語教育において軽視されてきた多言語資源を学びの基盤として活用することにより、帰国生と一般生の双方にとって有益な学びが成立することを示した点に意義がある。

今後は、まず古典教育における実践の蓄積を増やしていくことが重要である。古典は多くの英訳教材が既に存在しており、教授法のモデル化に適した領域であるうえ、「母語話者規範」に縛られにくいため、教員にとっても多言語使用への抵抗感が比較的低い可能性がある。こうした利点を活かし、古典教育を出発点として実践を広げることが現実的な方策となるだろう。

そのうえで、現代文や作文指導など国語科全般、さらには他教科との連携へと展開し、言語資源を統合的に活用する教育の可能性を検証する必要がある。また、授業実践の蓄積を通じて、TL を取り入れた国語教育の効果を定量的・定性的な両面から明らかにし、教育現場に具体的な手がかりを提供していくことが今後の課題である。

謝辞

本研究の実践にあたって授業での活動や調査に協力してくれた調査対象校 41 期生の皆さん、そして本稿の執筆・改訂にあたり、貴重なご指摘をいただきました 2 名の査読者の先生方に深く感謝申し上げます。

注

- 1) 詳細は、García & Li (2014)、加納 (2016) を参照。
- 2) なお、Waley (2010)、Seidensticker (2023) はそれぞれ 1921 年からと 1976 年から刊行されたものの復刻版である。また、対象クラスのうち 1 クラスの実践は 2024 年 11 月 14 日に第 35 回千葉県私学教育研修集会国語科研修会の研究授業として県内の私立学校国語科教員に公開した。
- 3) 例えば、古文本文では母北の方の説明部分である所が Waley 訳では母北の方の夫の説明部分となっているなど、差異が見受けられる箇所がある。

引用文献

- 朝倉和 (2017)「英語を用いた国語・古典授業の試み ドナルド・キーン英訳『徒然草』序段の活用」『広島商船高等専門学校紀要』 39, 119-126. https://doi.org/10.32221/hiroshimashosenkiyo.39.0_119
- 大津由紀雄 (2017)「次期学習指導要領から見た英語教育の今後の課題」『学術の動向』 22 (11), 101-103. https://doi.org/10.5363/tits.22.11_101
- 生越直樹 (1980)「二言語使用(バイリンガリズム)に関する文献目録：日本における研究」『待兼山論叢』 14, 39-46.
- 角田光代 (2023)『源氏物語 1』河出書房新社
- 加納なおみ (2016)「トランス・ランゲージングを考えるー多言語使用の実態に根ざした教授法の確立のためにー」『母語・継承語・バイリンガル教育(MHB)研究』 12, 1-22.
- 加納なおみ (2025)「トランスランゲージングと複言語主義ー両者の接点から新たな教育実践を切り開くー」『ヨーロッパ日本語教育』 27, 18-37.
- 国際バカロレア機構 (2014)『IB プログラムにおける「言語」と「学習」』
- 佐復秀樹 (2008)『ウェイリー版 源氏物語 1』平凡社
- 嶋田龍司 (2024)「英訳を用いた『枕草子』初段「春はあけぼの」の授業実践」『国語探究』 5, 122-125.
- 竜田徹 (2017)「英訳百人一首の日本語訳とその教材性(上)：国語科・伝統的な言語文化・古典の学習指導の充実に向けて」『佐賀大語教育』 1, 11-26.
- 對馬光揮 (2020)「国語科における教科横断型授業の可能性」読売新聞社(編)『第 69 回読売教育賞最優秀受賞者実践報告書集』 1-19. https://kyoiku.yomiuri.co.jp/2020_report.pdf
- 那須充秀 (2017)「言語を意識化する能力を育てる古典指導ー英訳『古事記』を教材とした授業よりー」『教育デザイン研究』 8, 88-97.
- 西岡省吾・片桐史裕 (2023)「漢詩の英訳による心情・情景のイメージの具体化の学習過程」『上越教育大学教職大学院研究紀要』 10, 45-52.
- 榎木貴之 (2023)『国語教育と英語教育をつなぐ「連携」の歴史、方法、実践』東京大学出版会
- 水谷修 (2008)「国語教育と日本語教育をめぐって」『言語政策』 5, 88-98.
- 文部科学省 (2024)『令和 5 年度 日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査結果の概要』 https://www.mext.go.jp/content/20240808-mxt_kyokoku-000037366_3.pdf
- 安田敏朗 (2014)「多言語主義の過去と現在ー近代日本の場合ー」『立命館言語文化研究』 26 (2), 3-20.
- Baker, C. (2006). *Foundations of bilingual education and bilingualism (4th ed.)*. Multilingual Matters.
- Cenoz, J., & Gorter, D. (2017). Minority languages and sustainable translanguaging: Threat or opportunity? *Journal of Multilingual and Multicultural Development*, 38(10), 901-912. <https://doi.org/10.1080/01434632.2017.1284855>
- Council of Europe. (2018). *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment – Companion volume with new descriptors*. Council of Europe. <https://rm.coe.int/cefr-companion-volume-with-new-descriptors-2018/1680787989>
- García, O., & Li, W. (2014). *Translanguaging: Language, bilingualism and education*. Palgrave Macmillan.
- Lankiewicz, H. (2020). Translanguaging: Implications for the language classroom derived from a revised version of CEFR. *Glottodidactica*, 47(2), 137-152.
- Li, W. (2018). Translanguaging as a practical theory of language. *Applied Linguistics*, 39(1), 9-30. <https://doi.org/10.1093/applin/amx039>
- Moore, E., & Vallejo, C. (2018). Practices of conformity and transgression in an out-of-school reading programme for ‘at risk’ children. *Linguistics and Education*, 43, 25-38.
- Seidensticker, E. (2023). *The Tale of Genji*. Tuttle Publishing.
- Vallejo, C., & Dooly, M. (2020). Plurilingualism and translanguaging: Emergent approaches and shared concerns. *International Journal of Bilingual Education and Bilingualism*, 23(1), 1-16. <https://doi.org/10.1080/13670050.2019.1600469>
- Waley, A. (2010). *The Tale of Genji: The Arthur Waley Translation of Lady Murasaki's Masterpiece with a new foreword by Dennis Washburn*. Tuttle Publishing.